

## <ラウンドテーブル報告1>

### 「学生と変える大学教育：FDを楽しむという発想」

【企画者】清水 亮 (三重中京大学)

橋本 勝 (岡山大学)

【司会者】清水 亮 (三重中京大学)

【報告者】濱名 篤 (関西国際大学)

宇佐見義尚 (亜細亜大学)

#### 1. FDの義務化の中で

2008年度から大学でもFDが義務化された。とはいえ、大学間でFDの取り組みの温度差はかなりあるように思われる。大学全入時代が到来し、中教審は、「学士」の質を維持するために、大学卒業までに学生が最低身につけなければならない能力を

「学士力」と定義し、各大学に卒業認定試験の実施など厳格なチェックを求める素案をまとめた。2008年12月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」では、各大学が、「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」、「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」、「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）」を明確に示した上で、これら「三つの方針」に基づく教育を行うために、FD及びSDをさらに組織的に推進することが求められている。大学のグローバル化とユニバーサル化の中、今、日本の大学は、FDの推進を梃子に、教育力を向上させることを求められている。義務化されても全体として進まないFDを推進するには、FDに対する発想の転換が必要ではないだろうか。

しかし現実には、2008年に行われた読売新聞社の「大学の實力」のアンケートに回答した52.4%（国立大学では20.5%なのに対し、公立大学では54.4%、私立大学では58.9%）の大学の学長が、総合自己評価（FD

への基本的な考え方や関心、取り組みの現状）C以下の評価を与えていることから、国立はともかく、公立、私立の多くの大学では、組織的FDが進んでいないことがわかる。

#### 2. FDの理想と現実

現在のFDは、さまざまなフォーラムや学会で成果が発表されているが、実際上、上位大学のリードによって推進され、中堅以上の大学の学生の資質とレベルを前提にしている印象が強く、残念なことに、ユニバーサル化のまっただ中にある多数の大学では、現在のFDの主流となっている手法は、ほとんど通用しないことが少なくない。また、中堅以上の大学においても、余りに精緻な教育ツールや教育理念はそれほど参考にならず、これまで熱心に教育に取り組んできた教員の意欲をかえって削ぐことも珍しくない。その一方で、FDの専門化、高尚化あるいは形式化、アリバイ化も進み、いわゆる「深海魚」のみならず、一旦は教育に関心を向かわせ始めた教員のいくらかは、FDから再び距離を置くようになってきているという指摘もある。

日本の大学教育はこれでいいのだろうか。そもそも、これで教育の受容者としての学生のプラスになっているのだろうか。学生の顔が見えない「三つの方針」に基づく初年次教育の導入や授業改善は何を生むのだ

ろうか。アメリカとは異なり、多くの学生が親からの仕送りで大学に通う日本では、学生の中に自分たちは大学教育の消費者であり、高度の質の教育を廉価で受けたいという意識は乏しく、最近まで、日本の大学では、大学教育の生産者として、消費者である学生に4年間の在学中にどれだけ付加価値をつけて卒業させるかについて正面から議論されることはなかった。

しかし、今日、大学のグローバル化、そして少子化に伴う大学全入時代の到来の中、日本の大学は、学生に在学中にいかにつ加価値をつけられるか、つまり大学として課題に真摯に対応せざるを得ない状況に直面している。実際、この課題への対応が、大学の将来を左右すると言っても過言ではない。

大学教育やFDの課題は、決して、GP採択大学の会議室や大学教育関連のフォーラムでの議論や全国紙の記事でだけ見つかるものではない。むしろ、日本全国の大学の現場に散在しているのである。散在する課題にまず対応するのは、現場の教員や職員である。大規模大学では大学教育開発センターを核として組織的なFDを推進し、課題の解決に邁進できるはずであるが、中小の大学では、組織には期待できない場合も多い。結局、日本の大学におけるFDの真の推進は、いかにしたら個々の教員の活力を向上できるかにかかっているのではないだろうか。そうだとすれば、そうした現場の教員たちの背中を少しでも押せないだろうか、そんな気持ちからスタートした『学生と変える大学教育:FDを楽しむという発想』(2009, ナカニシヤ出版)の企画について、FD・初年次教育の重鎮の関西国際大学の濱名篤先生とFD・キャリア教育に造詣が深い亜細亜大学の宇佐見義尚先生に、この本が目指したものについてのお考えをご披露いただく中で、どうしたらFDは進むかのご持論

を展開していただき、フロアーの執筆者ならびに参加者を交え討論し、FDの推進法を始め、初年次教育の構築の仕方と進め方、これらからの大学教育のあり方、FDのあり方へと議論が深まっていった。

### 3. 初年次教育はFDなのか—濱名氏からの問題提起

話題提供者の口火を切られた濱名氏は、まず『学生と変える大学教育』の狙いについて、グローバル化と少子化・全入時代の「教育の場(在学中の学生に付加価値をつけることができるのか)」という課題への対応として、二つのコンセプト、学生と変える大学教育とFDを楽しむが提案されているが、書評会をする気はなく、初年次教育学会の会員にとってのインプリケーションと論点を提起したいときつい前置きの後、1)教育方法の紹介、2)教育実践のガイドラインの紹介、3)初年次教育の実践例、4)教育手法のカスタマイズの実践例の四つの点で参考になると指摘がなされた。

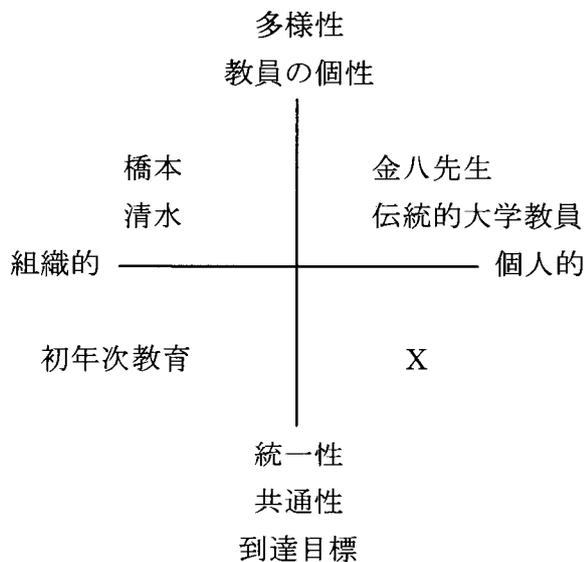
1)アクティブ・ラーニング=学生参画型授業と考えられるフィールドワーク、プロジェクト型学習などの教育方法が紹介されている。橋本メソッド、コミュニケーションペーパー、全員先生方式、クリッカー活用とクイズ、ICTの活用など明日からでも使える手法が提示されている。

2)教育手法は手法であり、教育実践において方向性を集約したガイドラインが必要である。実践のディシプリンとして「ティップス先生からの七つの提案」が示されている。同時に、教育手法や実践に関する情報をどのように得て、実践に移すかについて、FDネットワークの活用が提案されていることも重要である。

3)初年次教育の実践例の参考になる金沢大学の全学必修教養科目の誕生に至る過程が紹介されている。

4) 教育手法と一口にいても、どの大学においても一様に活用できるわけではなく、いかに大学に合わせてカスタマイズするかの実践例も紹介されている。

『学生と変える大学教育：FDを楽しむという発想』が初年次教育学会員に参考になる点を指摘され、濱名氏は、「初年次教育は、FDなのか？」という問いを投げかけられた。初年次教育とFDについての考え方の整理として、多様性（教員の個性）と統一性（共通性・到達目標）を縦軸に、組織的と個人的を横軸に



と表され、初年次教育とFD(X)についての考え方を整理された。

最後に、「大学教員の職能」と、それぞれ（特に教育）に対する正当な評価への希求と、学習者の能動性の重要性を尊重していく姿勢が、『学生と変える大学教育：FDを楽しむという発想』がどのように表れているかについて述べられた。

「大学教員の職能」に関しては、執筆者の数名が、熱心でなかった自らの変容を吐露しているのは、「専門家（教育学者）でない」ことへの恥じらいか誇りかは計り知れないものの、これは専門家のいない領域ならではの醍醐味とも感想を述べられた。学習

者の能動性の重要性を尊重していくという姿勢については、本全体で感じられるが、学生主体は目標なのか、内容なのか、方法なのか、この点については、執筆者のトーンが同じではなく、残念であると指摘された。

#### 4. キャリア教育と学生参画型FD—宇佐見氏からの視座提供

続いて登壇された宇佐見氏は、自らのキャリア教育科目の実践を紹介されながら、「学生と変える」ことの意義について、「学生の自己責任と教師の意識」に関する考えを具体的な事例を基に披露された。

まず、受講生に次のようなエピソードを紹介する。

先日、たまたま某文系私大の1年生の授業を見る機会があった。教壇に近い前列の席には20人ほどの学生が座っていた。中列の席には50人ほどの学生が、それぞれ3～5人くらいのカタマリをつくっている。授業が始まって5分ほどで中列席にいた1人の学生は、隣の学生とおしゃべりをしながら菓子を食べ始めた。机の下に携帯を隠してメールを打っている学生、両手で額を支えて眠ってしまっている学生。教室の最後列の5人の学生は、かばんを机の上に乗せたまま授業が始まってからもノートも筆記用具も出さないで時々隣の学生とひそひそ話す。そのうちに、1人が机にうつ伏せになって眠ってしまった。授業の中盤で、後列にいた5人が教室を出て行った。

次に、こうした授業風景についてどう思うかと、新入生に質問してみた。15人の新入生のうち13人が自己責任だから放っておけばよい、教員がいちいち注意すれば授業が中断されて迷惑である、大学は高校と違うのだから本人の自由だと答えた。残りの2人の新入生が、彼らには自己責任を取れる能力はまだ育っていない。彼らには学

習意欲がなく、マナーも出来ていない学生なのだから教員は、彼らと真剣に向き合って、彼らがいかに間違っているかを授業中でも指摘すべきだと答えた。それをしない教師は怠慢だ。授業は単なる知識伝達の場合ではない。学生にとって大学教師の研究者意識は百害あって一利なしというわけである。

宇佐見氏の実例の紹介は、学びの主権者たる学生が、大学の教員、教育を変える力になりうることを示してくれた。

## 5. 学生を「学びの主権者」へ

濱名氏と宇佐見氏のコメントの後、フロアーを交えて、教育力向上のために、「学生と変える大学教育」と「FDを楽しむという発想」という二つの新たなコンセプトと初年次教育の接点、そして、いかにしたら初年次教育を効果的に推進することができるのかについて議論が展開された。

そのなかで、今まで往々にして教員が自らの教授法を変えることと考えられてきた授業改善から、「学びの主権者」としての学生と共に授業改善を推進するという発想へ転換が必要であるという認識が改めて明らかになった。